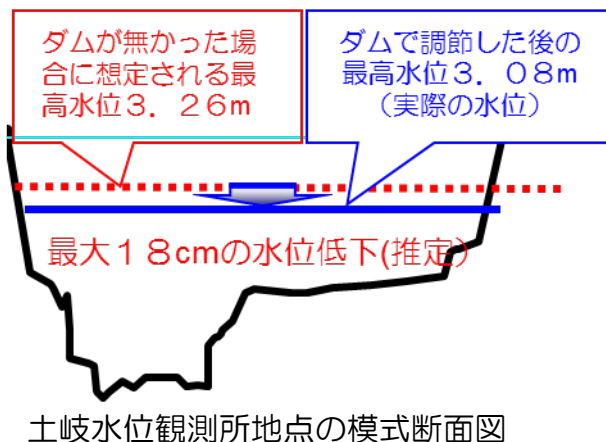
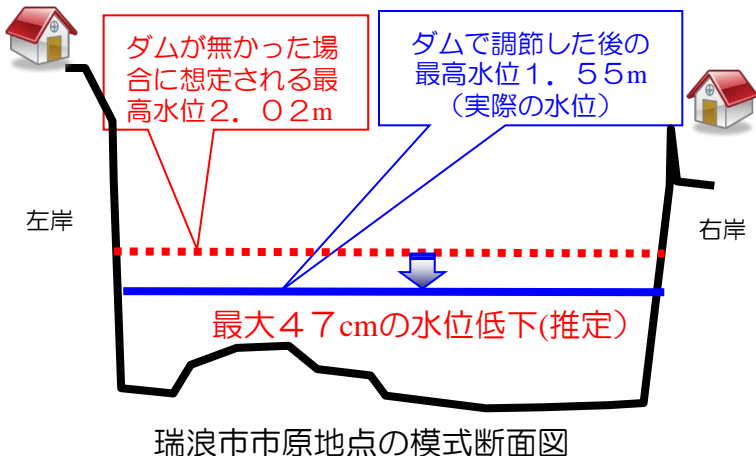
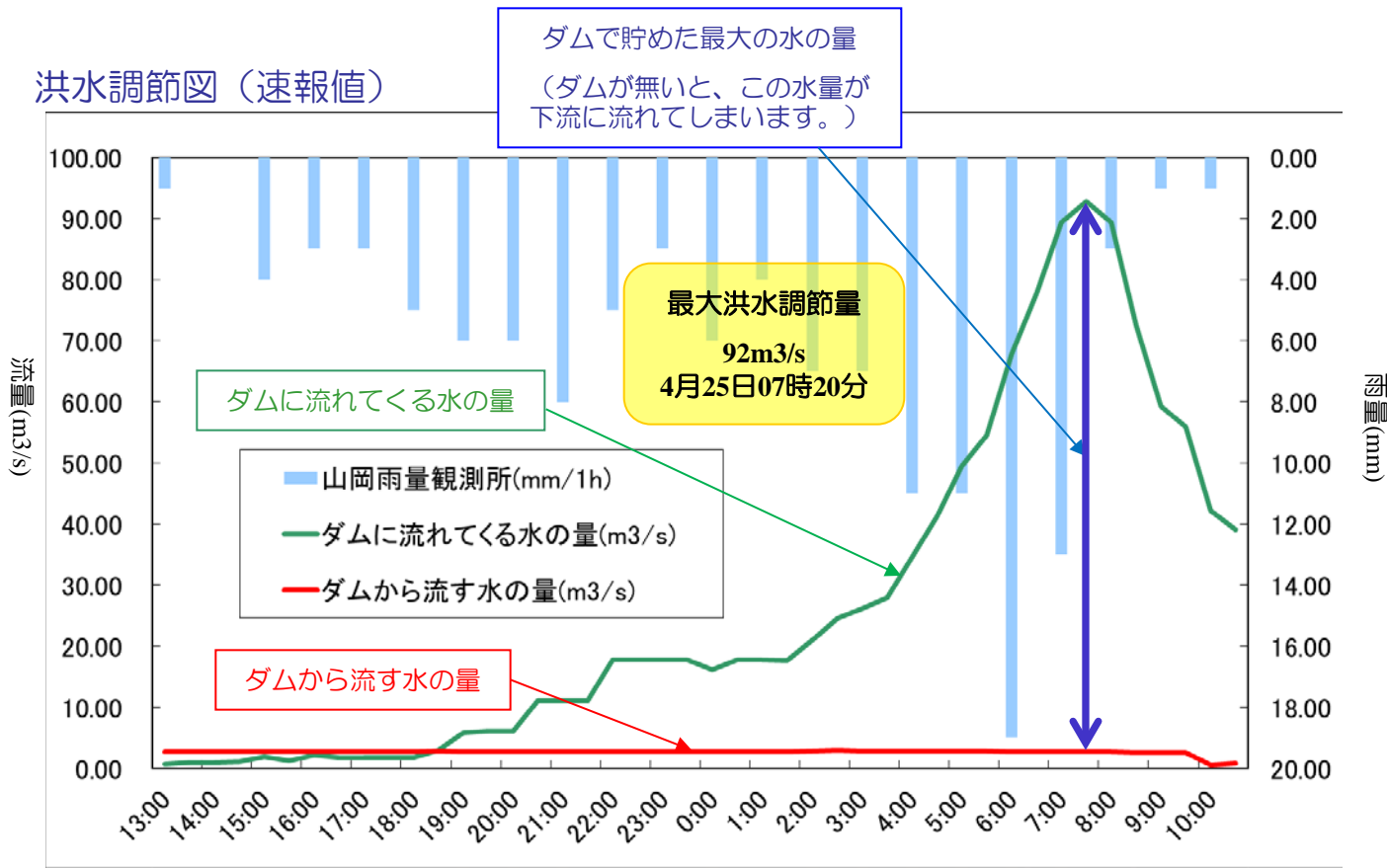


～小里川ダムの防災操作による河川水位の低減効果～

～563千 m^3 の水をダム湖に貯め、洪水を調節し、下流の被害を防ぎました～

平成30年4月24日から25日にかけての前線のため、小里川ダムでは、25日6時から25日7時までの間に19mmの降雨がありました(総雨量:山岡雨量観測所127mm)。また、下流の瑞浪市ではこの間に、1時間に9mmの降雨を観測しました。この雨に対し、小里川ダムでは、最大で毎秒92 m^3/s の洪水を調節し、ダム下流の瑞浪市市原地点(国道19号小里川橋付近)で最大47cmの水位を低下し、土岐水位観測所地点で最大18cmの水位を低下できたと推測しています。

洪水調節図 (速報値)

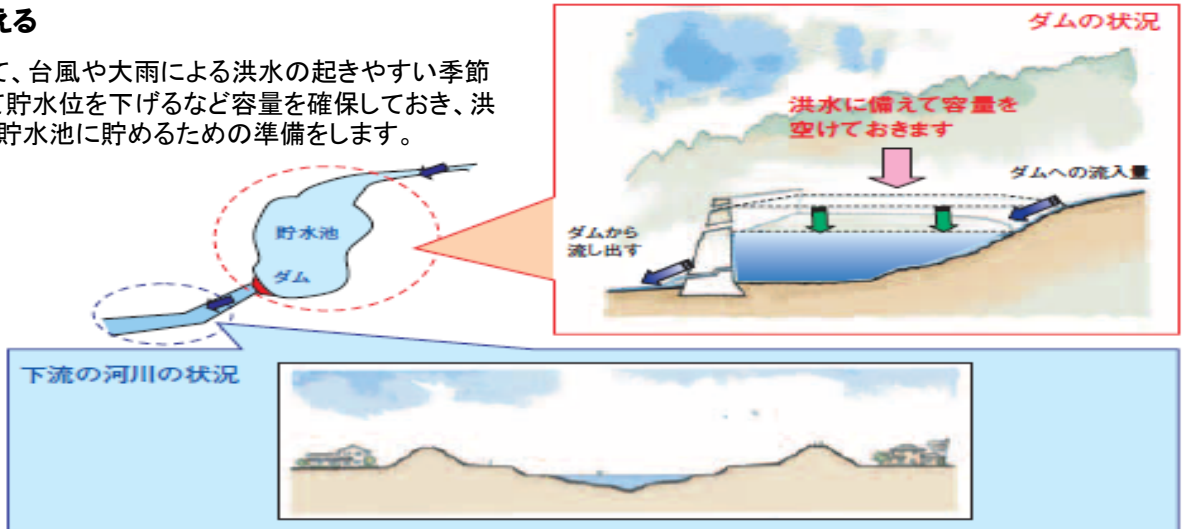


※本資料の数値等は、速報値です。今後の調査により変わる可能性があります。

(参考)防災操作の仕組み

①洪水に備える

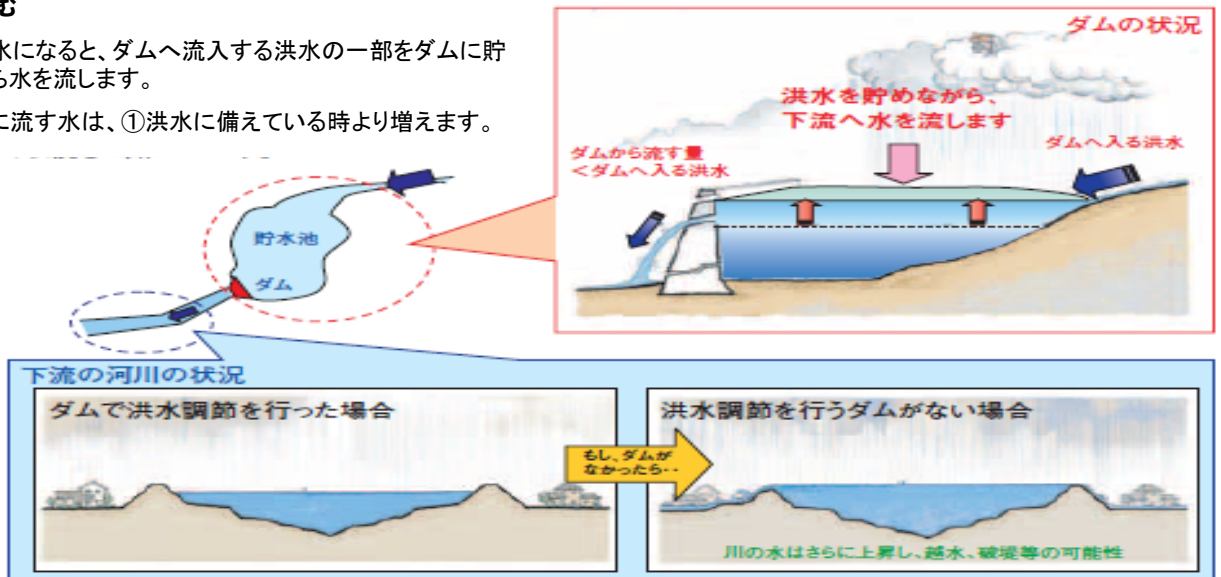
洪水に備えて、台風や大雨による洪水の起きやすい季節には、前もって貯水位を下げるなど容量を確保しておき、洪水の水をダム貯水池に貯めるための準備をします。



②洪水を貯め込む

大雨が降り洪水になると、ダムへ流入する洪水の一部をダムに貯めつつ、ダムから水を流します。

ダムから下流に流す水は、①洪水に備えている時より増えます。



③計画規模を超える洪水への対応

異常な豪雨により、計画よりも大きい量の洪水がダム貯水池へ流れ込むことがあります。ダムでは②のように洪水を貯めつつ下流へ流す操作を行いますが、ダムに貯めることができる水量には限界があります。

このような場合には、下流に流す量を徐々に増加させ、貯水池に入ってくる水量と同じ量を下流に流すよう(自然河川状態)にします。

